The Journal of Kamakura Women's University, Vol.24, pp.145-151, March 2017

資料

# 「親子の絆づくりプログラム“赤ちゃんが来た！”」（BPプログラム）実施の現状と課題

## ―連携に着目して―

寶川 雅子（初等教育学科）

# Current Status and Issues of BP Program: Focusing on Cooperation

Masako Houkawa
Department of Primary Education, Kamakura Women's University Junior College

**Abstract**

In this study, we looked into BP to which a mother and her first baby (2-6 months) can participate, particularly, collaborated efforts to have BP in the actual BP implementation cases in two facilities.

It was revealed that, in order to have BP, instead of merely organizing BP, each organizer was taking advantage of strong points of it to organize BP. City-A was fully using its good relations among all sections, and from the recruiting of participants to the supports after BP, they were supporting the participants according to the expertise of each section. An NPO of Ward-B of City-B organized BP in the way that the participants would continue to use their facility after BP. The staff of the NPO valued building good relationships with the parents during BP, and was creating the environment that encouraged them to come to their facility afterwards so they could make a use of it to help their child rearing.

They are simply collaboration efforts, but it was indicated that good collaborations can help lives of mothers and babies for the better.

Key words: baby program (BP), mother and the first child, cooperation
キーワード：ベビープログラム（BP）、母親と第一子、連携

## はじめに

「親子の絆づくりプログラム“赤ちゃんがきた！”」（愛称＝ベビープログラム）が、BPの正式名称である。本稿では、一般的な呼ばれ方、BPとする。

BP参加の効果は、①地域での子育て仲間づくり　②孤育てからの脱却　③子育ての不安感減少等に発揮されている。中でも、BPへの参加をきっかけとして、BP終了後にも、継続した関係づくりがなされていることは、BPが単なる実施を目的としているプログラムではなく、参加者が主体となるような視点に立っていることを意味していると考えられる[1)]。

BPを実施するためには、ファシリテーターの

資格を取得する必要がある。BP は、構造化されたプログラムであり、ファシリテーターは実施の手順に従ってプログラムを進めるわけである。しかし、どんなに同じ内容であっても、ファシリテーターによって、参加者が受ける印象は異なってくる。また、プログラム実施の効果も異なってくる。要するに、BP ファシリテーターは、ファシリテーター自身がプログラムの効果に影響を及ぼすことを意識し、プログラムの目的を理解し、ファシリテーターとしての柔軟性を養い、参加者が主体となるよう黒子とし徹する力量が求められるのである。ただ単に、研修を受け、ファシリテーターとしての資格を取得したというだけではなく、常にファシリテーターとして、各プログラムにおいて参加者が主体となれるような対応が求められている[2)]。

BP が子育てに効果を発揮するためには、BP を単に実施するだけではなく、参加者を募る段階から BP 実施後の支援までを視野に入れた、主催者側の連携の図り方も大切な要素となる。これまで、BP の効果検討[1)]、ファシリテーターの役割[2)]について調査を進めてきた。効果については、特に、BP 実施後において、BP 参加をきっかけとして、地域の中での自主的な子育て仲間づくりが行われ、その結果、子育てについて話し合える仲間ができ、子育ての不安軽減にもつながっているという、産後早期における子ども虐待未然防止の役割を果たしている結果が得られた[1)、3)、4)]。本稿では、BP 実施の経験から、BP が子育てに最大限の効果を発揮するためには、主催者側の、参加者募集から実施後の支援に至るまでの連携意識が必要であるという視点に立ち、BP 実施における連携について検討を進めていきたい。

## 目的

BP 実施に伴う連携の実際と課題について検討を行う。

## 対象

A 県 A 市が主催し実施している BP 講座及び、A 県 B 市 B 区内の NPO 法人が主催している BP 講座。

## 倫理的配慮

本研究を実施するにあたり、BP 主催者に対し口頭及び文書において研究の目的・内容等説明を行い、承諾を得ている。また、BP 参加者に対しては、BP 実施時に研究主旨等を口頭で説明し、同様の内容を文書にて配布し、承諾を得ている。

尚、BP に関わる調査に関しては、鎌倉女子大学研究倫理委員会の承認を得ている（承認番号：鎌倫―14003）。

## BP の内容

以下に、BP の内容を紹介する。

1）プログラムは、構造化されたプログラムである。

2）テキストと DVD を活用しながら、子育てに必要な知識や方法を学んだり、グループで話し合いをしながら お母さん同士のつながりを徐々に深めていく。

そして、プログラムが終了するころには、仲間と互いに助け合って子育てしていくことを学んでゆく。

3）BP プログラムへの参加は、最大で20組。

4）実施時間は 1 回につき 2 時間。後半の30分は、質問・交流タイムの時間としている。参加者同士が自由に交流できたり、専門職の者が同席している場合は、困り事などを自由に質問できる時間。

5）1 回 2 時間を週 1 回、連続して 4 週の 4 セッションで 1 つのプログラムとなる。

6）各回のテーマが決まっており、自由にコミュニケーションを図ることが苦手であっても心配なく参加できる。

## BP 実施の効果

2014年 2 月に、BP を実施して以来、BP を実施後、一定の期間を置き、BP の子育てへの効果を検討している[4)]。

1）方法

プログラム実施後 1 ～ 3 か月後に参加者宅へ郵

送するアンケート調査による。

2）期間

2014年 2 月～2015年 9 月。

その間に BP を 6 回実施（A 市及び B 市 B 区内の NPO 法人）。

3）人数

参加者合計は77人。

アンケート回答者は、45人。回答率58％。

4）アンケート内容

アンケート内容は全 8 項目。Q1 から Q7 は選択式。Q8 は自由記述とした。以下にアンケートの内容を示す。

**1．BP に参加をして、赤ちゃんのことや育児のことを話し合える人はできましたか？**

①できた　②すこしできた　③あまりできなかった　④できなかった

**2．BP に参加をしたことで、子育ての負担感は変わりましたか？**

①軽くなった　②少し軽くなった　③変わらない　④少し負担が増した　⑤負担が強くなった

**3．BP に参加をしてから、落ち込んだ気持ちは変わりましたか？**

①減った　②少し減った　③変わらない　④少し増えた　⑤増えた

**4．BP に参加をしてから、子育ての孤立感は変わりましたか？**

①とても軽減された　②少しは軽減された　③変わらない　④孤立感が少し増した　⑤孤立感が増した

**5．BP に参加をしてから、赤ちゃんとゆったりとした気分で関われる時間は増えましたか？**

①時間が増えた　②少し増えた　③変わらない　④時間が少し減った　⑤時間が減った

**6．BP に参加をしてから、子育てをしている自分に「親としての自信」に変化はありましたか？**

①自信が持てた　②少し自信が持てた　③変わらない　④少し自信を失った　⑤自信を失った

**7．BP に参加をしたことは、子育てに役立っていますか？**

①とても役立っている　②少し役立っている　③変化はない　④あまり役立っていない　⑤全然役立っていない

**8．BP に参加をしたことで、その後の子育てに変化があったのか、その他、BP に参加をしたことで、もし、何か変化がありましたらなんでもかまいませんので、以下に記入してください。**

5）アンケートの結果

Q 1 ～Q 7 について

Q 1　話し合える人が出来た：
できた・すこしできた　90％

Q 2　子育てへの負担感：
軽減・すこし軽減　86％

Q 3　子育てに対して落ち込んだ気持ち：
軽減・すこし軽減　71％

Q 4　子育ての孤立感：とても軽減・軽減　81％
＊もともと感じていない⇒19％

Q 5　赤ちゃんにゆったりとした気持ちで関われる：
増えた・少し増えた　81％

Q 6　親としての自信が持てた：
持てた・すこし持てた　65％
＊あまり変わらない⇒31％

Q 7　BP プログラムがその後の子育てに役立っているか：
とても役立っている・役立っている　92％

Q 8　（自由記述）について

Q 8 は、参加者から、自由な意見をいただく項目である。以下に、いただいた意見・感想を、内容別に分類し、集計した結果を、回答の多い順に報告する。尚、人数は、延べ人数である。

仲間が出来た喜び　30人（61％）
子育てやイベントに関する情報を共有　6 人（12％）
子育てに対する気持ちが楽になった　5 人（10％）
気持ちにゆとりを持って子育てができる　5 人（10％）
安心して子育てができる　4 人（ 8 ％）
外出する勇気　4 人（ 8 ％）
孤立感の減少　3 人（ 6 ％）
相談できる仲間　3 人（ 6 ％）
子育てに関する不安の軽減　2 人（ 4 ％）

子どもとのかかわり増　1人（2％）
夫婦関係の改善　1人（2％）

以上、アンケート調査の結果から考えると、BPに参加をすることは、子育てへの一助となることがわかる。虐待に至る要因として、身体的、精神的、社会的、経済的等の要因が複雑に絡み合って起こることが明らかにされてきている。特に最近は、母親役割の強要や経済不況等世相の影響や、少子化や核家族化からくる未経験や未熟さ、世代間伝承等が指摘されているが（子ども虐待対応の手引き 厚生労働省　平成21年3月31日　改正版）、今回の調査から、これらが軽減されることが明らかになった。そのため、BPは子育て支援・産後早期からの子ども虐待予防に一定の効果が期待されるプログラムであると考えてよいと思われる。

### A市実施における連携

1）BP実施の経緯

そもそもA市では、子育て支援及び虐待予防を目的として、乳幼児期から小学校入学時期の子どもを持つ家庭を対象として複数の取り組みを既に実施している。しかし、初めての子育てにおいて最も不安を抱えやすい産後早期からの乳児に特化した支援は、乳児全戸訪問のみであり、乳児期のみを対象としたさらなる支援の方法を模索しているところであった。BPは、著者がA市での実施を提案したことに起因する。BPの対象は、初めて0歳児期の子どもを持つ母親とその子どもである。BPを実施することにより、A市でも、0歳児期の赤ちゃんを育てている家庭にも支援を行うことが可能となる。産後早期からの支援を行うことが可能となるのである。要するに、産後早期の時期から小学校入学までのすべての年齢をカバーして子育て支援を行うことが可能となるのだ。

BP導入の需要があるのかどうかを調べるため、試みとしてBPを実施したところ、参加者から「今後もA市で実施していって欲しい」という要望が強く、参加者の意見を反映してA市での実施に至った。

2）BP実施の現状（連携に着目して）

ここでは、BP実施前、実施中、実施後に分け、連携に着目をしてBP実施の現状を考えていきたい。

2）－1　BP実施前における連携の現状

BP実施前では、主に参加者募集に関する作業が連携に大きく関係してくる。

A市の場合、参加希望をまとめる部署は、子育て相談や子ども虐待等を担当している部署である。この部署では、参加者募集に当たり、市報や市のホームページへの掲載を行ったり、登録者を対象としたメール配信、母子が足を運ぶ場所への掲示及びチラシ設置等を行っている。また、募集の窓口も、この部署が担当をしている。

さらに、参加者への周知に関しては、母子保健関連部署も関与している。乳幼児全戸訪問時、各家庭にチラシの配布や必要に応じて個別に声掛けをして参加を促したり、役所内の母子保健窓口にチラシを設置する等の連携を行っている。また、保育関連の部署でも、保育所や子育て支援センター等へのチラシ設置や、保育所や支援センターに来所した母子に対し、必要に応じて個別に声をかける等行っている。

会場確保、実施時期に関しては、子育て相談や子ども虐待等を担当している部署と、保育関連の部署との連携により決定している。

2）－2　BP実施中における連携の現状

A市の場合、実施主体は、子育て相談や子ども虐待等を担当している部署であるが、BPを実際に実施するのは、保育関連の部署である。また会場も、保育所や子育て支援センターなど、保育担当部署の施設で実施することが多い。さらに、ファシリテーターもA市所属の保育士が務めている。ファシリテーターを務める保育士の一人は、会場となる施設（保育所など）に所属しているか、あるいは、近隣の施設（保育所など）に所属している保育士が担当し、BPが終了したのちでも、地域の施設のなかに、顔なじみの職員がおり安心して相談ができる、あるいは、園庭開放等に気軽に足を運んでいただく等、BP実施後を見据えた配慮をしている。また、BP実施中に、会場園で

ある保育所に、母子保健担当部署である保健師の巡回訪問が行われる場合には、保健師に BP 会場にも足を運んでもらい、参加者の相談にも応じてもらえるような連携を図っている。

2）－ 3　BP 実施後における連携の現状

A 市では、BP 実施後も、参加者の必要に応じて支援を行えるように、各部署への紹介や、各部署との情報共有を行い、継続した支援が行えるような部署間の連携を図っている。また、会場が保育所の場合が多いということや、ファシリテーターが、地域の保育士という利点を活用し、困ったら気軽に保育所に足を運べるような、BP 参加者が、BP 実施後も孤立しないような配慮を行っている。

### B 市 B 区内の NPO 法人実施における連携

1）BP 実施の経緯

この NPO 法人は、親と子のつどいの広場事業、地域子育て支援拠点、小規模保育事業、一時保育等、地域の子育てを、保護者に寄り添いながら支援している法人である。

この法人のつどいの広場事業では、地域の子育て家庭のニーズに応じて 1 年を通じて様々なイベントも開催している。BP は、このイベントの一つとして年 2 回実施されている。きっかけは、著者が、BP の紹介をしたことなのであるが、この法人が使用している建物には、BP 実施に適した環境（畳の部屋、参加者だけで話し合えるスペース、遠慮なく授乳ができる場所等、参加者が安心して安全を感じられる環境）が整っており、かつ法人の考えが BP の目的にも合っていたこと等により、2014年より BP 実施に至ったのである。初回は、試験的に実施をしたが、参加者の継続実施の要望が強かったり、実施後の参加者に変化がみられる等、実施することの、効果が期待されるため、現在に至るまで継続して実施しているわけである。

2）－ 1　BP 実施前の連携における現状

実施前は、特に、募集に関する連携が必要となってくる。この NPO 法人では、同法人の施設にチラシを配布・設置したり、法人のホームページに掲載をしたり、役所内の子育て支援関連のチラシ設置場所への設置等、法人内でできる限りのことを行っている。また、区主催の赤ちゃん教室の手伝いに出向いた際に、可能ならば、チラシを配布し、口頭で説明をして参加者を募っている。

BP の参加対象は、生後 2 か月から 6 か月であり、特に月齢の低い乳児への情報周知の機会がほとんど得られないため、募集に関しては、毎回、試行錯誤を重ねている。法人職員の行動力と熱意が募集につながっている現状である。

2）－ 2　BP 実施中の連携における現状

BP を実施する者は、外部の BP 認定ファシリテーターである。プログラム実施時には、NPO 法人の職員も同席しプログラムでの様子を把握している。BP の場に、職員が同席することにより、BP 開催日以外でも、BP で顔見知りになった職員がいるということで、法人に気軽に足を運び、親子で遊んでいったり、子育ての相談をしていくなどの場として、活用してもらえるようになってくる。些細なことでも気軽に足を運んでもらえるということは、子育ての孤立化や、不安を軽減する等の効果もあり、子育ての支援・子ども虐待防止につながる。

3）－ 3　BP 実施後における連携と現状

この、NPO 法人で BP を実施することの利点は、BP への参加をきかっけとして、BP 終了後には、母子が、この NPO 法人を安心できる子育て支援の場として気軽に活用してくれるようになり、継続して必要に応じた支援を行うことができることである。そのために、ファシリテーターは、この、NPO 法人の特徴を理解し、BP 実施が、BP 終了後への支援につながることを理解してファシリテートする意識も必要である。

### 利点を生かした連携（まとめに変えて）

本稿では、BP 実施に関わる連携について、A 市、B 市 B 区内の NPO 法人での BP 実施の実際から検討を行った。

双方とも、2016年春時点での連携について紹介をしたのだが、それは、試行錯誤の繰り返しによってようやくたどり着いた連携の体制である。A 市も、B 市 B 区の NPO 法人も、子育ての環境を

よりよくしていきたい、安心して子育てをしてほしいという母子の立場を第一に考えているからこその、連携であると考えられる。やや語弊のある言い方かもしれないが、もし、世間体だけを考えているならば、単に BP を実施したという既成事実を作ればいいことなのである。にもかかわらず、各々、募集や会場等試行錯誤をして実施しているということは、母子第一に考え、本気でより良い子育て環境を作っていこうとする意識の表れではなかろうか。

産後早期に子育ての孤立化を防いだり、子育ての不安軽減を図ることは、子育て支援に加え、低年齢児の虐待予防、虐待死防止につながることにもなる。

A 市の場合、主催部署が、子育て相談や子ども虐待を担う部署であるわけだが、役所である利点を生かして、母子保健部署、保育の部署それぞれの特徴を上手に活用し、スムーズな連携を図っている。各部署間の関係性が良好であるためになし得ることである。結果として、BP には、全戸訪問時に気になった母子も参加でき、BP に参加をしたことで、仲間ができて外出する勇気がわき、些細なことも相談できたり、話しをする相手もでき、気持ちにゆとりを持って子どもと向き合えるようになる参加者も少なくない。また、転入してきたばかりで、誰も知り合いがおらず、どこに相談をしてよいのかもわからなかったが、全戸訪問で BP のチラシをもらい、とりあえず参加をしてみたら、すぐ近所に住んでいる参加者と出会え、以降、お互い行き来をする仲になれたという参加者もいる。このように考えると、役所内の部署間の連携がスムーズであるという些細なことではあるが、そのことが市民の生活にも影響していることがわかる。A 市の場合は、母子保健部署だけではなく、ファシリテーターは、A 市所属の保育士であり、また、会場は保育所や子育て支援センター等、BP 終了後にも、参加者が足を運べる場所を選んでいる。また、会場となる保育所に所属している保育士をファシリテーターにすることで、参加者にとって、場所だけではなく、人とのつながりも継続したものとなり易い。知っている保育所だけれど知っている人がいない保育所と、知っている保育所だし知っている保育士もいる保育所とでは、やはり後者のほうが足を運びやすいし、相談もしやすい。このように、参加者の立場を考えて連携の中で会場選びやファシリテーターの担当などを決めている。

B 市 B 区の NPO 法人の場合、BP の対象が限られていることもあり、特に募集に関して試行錯誤を繰り返し、新たな募集場所の開拓を常に行っている。BP を実施し始めた頃は、NPO 法人内の施設への掲示やチラシの設置、NPO 法人のホームページへの掲載程度にとどまっていたが、実施回数を重ねるごとに、区で実施している赤ちゃん教室に職員が出向き、手伝いをしながら BP の紹介をしたり、地域の赤ちゃん訪問員にチラシの配布を依頼したり、法人内で実施するイベント時に BP の宣伝をしたり等、募集につながりそうな機会を職員が捉え、様々な人・場所との連携を図り、募集活動を行うようになってきた。参加者の中には、赤ちゃん訪問員の紹介で BP を知り、しかし、自宅から赤ちゃんを連れて 2 人だけで出かけることに自信がないので、BP 初回には赤ちゃん訪問員と一緒に会場に来てみたところ、この外出がとても良かったので、外出をすることに自信が持て、以降、不安を持つことなく母子で外出ができるようになってきたという参加者もいる。また、かつて BP に参加をした方と、同 NPO 法人の他の施設でたまたま出会った際に、参加をしてよかったという話を聞いて興味をもち参加を決めたという者もいた。BP 実施後には、ほとんどの参加者が、様々な形で同 NPO 法人を利用しており、BP の会場がそのままその後の子育ての憩いの場となっている。また、参加者と職員も、BP 実施時からお互いを知っているので、BP 終了後にもそのまま継続して関われることも、参加者にとっては、安心できる要素となっているようである。

各実施主体の特徴・利点を最大限に生かして BP を実施することで、単に BP を実施したという既成事実にとどまらず、BP 実施後にもつながる継続した支援が可能となっていることがわかる。

単なる連携と捉えることも可能なのかもしれな

いが、連携如何によって、参加者の子育て生活が大きく変わってくることもまた事実であることがわかる。

最後に、どんなに連携がスムーズであっても、そこに携わる特に母子と直接かかわる者が、子育てを支援しよう・産後早期からの子どもの虐待を予防しようという意識とともに、子育ては参加者が主人公であることを念頭に置いて、母子と関わらなければ、結果的に子育て支援につなげることができない。子育て家庭に関わる者そのものが、人的環境として母子に大きく影響を及ぼすことを忘れてはならない。新生児を持つある母親は、「自分はへとへとになるまで一生懸命赤ちゃんのお世話をしているのに、全戸訪問で『お母さん頑張ってね！』と言われてしまった。これ以上、どうやって頑張ればいいのかわからない」と、涙を流していた。

人的環境として、母子が安心して子育てを行える環境を整えるためには、子育てを支える立場として何に配慮すべきか考えることも必要であろう。日ごろ、何気なく行っていること、発している言葉、仕草にこそ、また、上下の立場を作ろうとする無意識な感覚等、意識をしないうちに相手を傷つけていることもあるかもしれない。連携の中には、人的環境も含まれていることを忘れてはいけない。

### 参考文献

1）早期虐待予防を目的とした子育て支援プログラムについてー親子の絆づくりプログラム“赤ちゃんがきた！”の実施からわかる参加者への効果ー　寶川　雅子　鎌倉女子大学紀要　第22号　51-59頁　2015年3月

2）子育て・親育ち支援活動の実際と課題ーベビープログラム（BP）からファシリテーターとしての役割を考えるー　寶川　雅子　鎌倉女子大学紀要　第23巻　71-78頁　2016年3月

3）児童虐待防止のための子育て支援プログラムについて　寶川　雅子　鎌倉女子大学紀要　第21号　93-100頁　2014年3月

4）0歳児期の子どもとその母親を対象とした子育て支援について―BP プログラム実施の意義と課題―　寶川　雅子　第17回日本子ども家庭福祉学会発表要旨集　2016年6月

＊本稿に掲載した BP 実施効果の詳細については、第17回、日本子ども家庭福祉学会で詳細を発表している。BP の効果検討については、現在も継続中であるが、2016年9月現在において、アンケート人数に変更はなく、効果の結果も変更がないため、データ数値も同じとなっている。

5）NPO 法人　こころの子育てインターねっと関西　ホームページ　www.kosodatekki.com　（2016年9月6日閲覧）

### 要旨

本稿では、初めて生まれた赤ちゃん（2～6か月）とそのお母さんが参加できる、BP について、特に BP 実施における連携について、2か所の実施施設での BP 実施の実情から検討を進めた。

BP を実施するためには、単に BP を実施するだけではなく、各実施主体の利点を生かした連携の中で BP が実施されていることが分かった。A 市では、役所内の各部署の良好な連携を生かし、参加者募集から BP 実施後の支援に至るまでを、各部署の特徴に応じて参加者のサポートを行っている。B 市 B 区の NPO 法人では、法人の特徴を生かし、BP 実施後も同じように施設を利用してもらえるように配慮をしている。職員が BP 実施中から参加者との関係を大切にし、BP 実施後は、NPO 法人内の施設に気軽に足を運び、子育てに役立ててもらえるよう環境づくりに心掛けているのである。

単なる連携ではあるが、望ましい連携を行うことは母子の生活も望ましい方向へと傾いていくことが分かった。

（2016年9月12日受稿）